書評：

小松 史生子 著『探偵小説のペルソナ　奇想と異常心理の言語態』

IGAWA Osamu
井川 理

1. 本書の課題

本書は、三遊亭円朝、黒岩涙香、村山塊多、江戸川乱歩、横溝正史、小栗虫太郎、高木彬光といった作家らのテクストを対象とした、著者の日本の探偵小説に関する論考を集成したものである。本書で扱われるテクストの発表時期は1880年代から1950年代までと幅広く、日本の探偵小説史の始原に位置する翻案テクストを対象とした「第1部 翻案コードの表象としてのペルソナ」、探偵小説ジャンルの成熟期である1920-30年代に発表されたテクストを対象とした「第2部 モダニズムが煽る異常心理構造としてのペルソナ」、そして戦中から戦後にかけて発表されたテクストを対象とした「第3部 断絶と継承のジャンル文体が生み出すペルソナ」というテクストの発表時期によって区分された3部9章から構成される。そのなかでも最も多く言及されるのは江戸川乱歩であり、初期の『パノラマ島奇談』以外、『人間豹』、『幽霊塔』、『孤島の鬼』、『影男』といったいわゆる通俗長編テクストが採り上げられている点に本書の問題意識の所在がうかがえる。

まず、本書の基本的な分析視角を確認しておきたい。著者は「序章」において、役者が「期待されている役割を果たすことにより、ひとつの精神共同体の一員であることを証明する」という吉田夏彦「仮面と人間」(山城祥二編『仮面考』リブロポート、1982年4月)における仮面劇に関する考察を探偵小説論へと敷衍し、「探偵・被害者・犯人」といった作中人物に付与される「ペルソナ」を各時代の読者共同体の無意識を集約的に表象するものとして捉え、考察していくことを本書の目的として設定している(16-17頁)。ただし、この「ペルソナ」とはテクストから独立して論じられるような「記号的キャラクター」に置換しうるものではなく、あくまで「時代が必然的にもたらす記号的類型性から出発しつつ、時に思わずそこから踏み出してしまう過剰なディスクールの様態」(14頁)と不可分のものとされる。すなわち、本書では、同時代の政治・経済・社会・文化的な言説やメディア環境といった複数の因子が作用する小説テクストの「ペルソナ造型の過程」(強調引用者)を精緻に分析していくことに主眼が置かれるのである。またこのような点にこそ、本書の対象選択の理由が存する。なぜなら、著者によれば探偵小説とは、同時代的な記号がまとう「コノテーション」と「読者の期待の地平」とが複合的に絡み合い構成される「ペルソナ造型の過程を、多かれ少なかれ自己言及するメタ構造の迷宮を内包する、絶え間ない運動体」(273頁)であると規定されるからである。すなわち本書は、このような「読者の期待の地平」に寄り添い通俗的であることを志向しながらも、その形成過程自体を暴露してしまう探偵小説テクストの言説機制を分析することで、テクストの通俗性それ自体を、各時代状況との折衝の過程が刻印されたアクチュアルな動態として積極的に捉え直そうとする「言語態」分析の試みであるといえる。以下では内容紹介もかねて、各章で展開される議論を概観してみたい。

2. 各章の概観

第1部では、翻案という営みに孕まれる日本

／西洋、前近代／近代の葛藤が炙り出されていく。第1章では、三遊亭円朝『欧州小説 黄薔薇』における、自身を裏切った主人公の新人官吏・江沼を没落させようと謀る外妾という位置にありながら品行方正でもあるというお吉の「翻案型毒婦」としての両義性を孕んだ人物造型が剔出される。輸入新薬の「クロロホルム」における毒／薬という両義的なコノテーションとも共振するこのようなお吉の「毒婦」物語から、その謀略に陥れられる江沼の妻・お万の「因果応報」の物語へと転調する捻れを孕んだテクストの構造は、両者によって体現された開化期の「〈内〉と〈外〉」に二極化される受け手の欲望に伴う亀裂を刻印したものだったと論じられる。

この前近代／近代の葛藤をめぐる問題系は、黒岩涙香『怪の物』と村山槐多『悪魔の舌』から江戸川乱歩『人間豹』へと至る翻案の系譜を辿る第2章でも考察される。『怪の物』では「妊婦をめぐる俗信のコード」と「欧米輸入の近代科学であるところの優生学」の言説とを併記する形で「人獣」が生まれた原因を説明する「因果律のコード」が採用されるのに対して、大正期の『悪魔の舌』では人肉を欲するようになる詩人の「舌」の変化を、「劇しい神経衰弱」による「詩人の幻想」として結論付けてしまう「非合理の物語」となっていることが指摘される。『人間豹』では、新たにロンブローゾらの「犯罪人類学」の言説を取り入れ視覚的に弁別可能な「人獣」の形象を創出しながらも、その生誕の理由が明かされない「非合理の物語」の構造をとっている点に『悪魔の舌』の影響が見出されると同時に、乱歩自身の初期短編の構造を反復することでテクストを探偵小説として成立させようとする言説的な企図が伏在していたことが指摘される。

第5章で論じられる江戸川乱歩『孤島の鬼』でも、民間医療／近代医療、地方／都市といった対立項の拮抗に同様の問題系が看取されるものの、そこでは最終的に後者が前者に屈服してしまうテクストの様態が析出される。興味深いのは、このような構図と乱歩自身のメディア意識とが重ね合せられ考察される点である。同時期に乱歩は『新青年』のモダニズム化に違和感を覚え、講談社系の大衆雑誌へと舞台を移し通俗長編を執筆していくことになる。その移行期のテクストである『孤島の鬼』に見出される都市から地方へと向かうベクトルは、テクストが掲載された博文館の大衆雑誌『朝日』の読者層の拡大方針と連動したものであったと同時に、「通俗性によって購われる想像力のリアリティ」を逆説的に「自身のアイデンティティの確保」(147頁)のための戦略へと転化する乱歩自身の作家的営為を表象するものでもあったのである。

この乱歩の通俗長編期における作家的アイデンティティの問題は、涙香から乱歩へと再翻案化された『幽霊塔』の「仮面」表象の差異を論じた第3章でも考察される。涙香テクストにおいて、「殺人犯として見なされた女性が、無実という主体性を獲得するために実存としての仮面を利用して他者の眼差しに立ち向かう闘いの物語」(90 - 91頁、強調原文)を象徴する「非在の在」として捉えられる「仮面」は、『幽霊塔』を含めた1930年代の乱歩テクストではその裏にあるべきはずの「主体を喪失した虚体の相」

『探偵小説のペルソナ
奇想と異常心理の言語態』
小松 史生子 著
双文社出版
2015

(96頁)を示すものとしてある。著者は、このような変容に、同時期のメディアにおいて「江戸川乱歩」という固有名(=仮面)が実体とは乖離した形で流布していくという「文学場のシステムに組み込まれた作家の主体喪失」(100頁)のアナロジーを読み取るとともに、その状況自体を告発するストラテジーが伏在していたと論じている。

第2部では、探偵小説ジャンルの形式と通俗性との関わりが考察される。江戸川乱歩『パノラマ島奇談』を考察した第4章では、同時代の都市空間において「〈見る/見られる〉関係」を集約的に表象する学術・娯楽施設であった水族館が、テクストにおいて自他を区画する「見る」関係から「触れる」関係へと移行する境界的なトポス=「水族館幻想」として現出しながらも、最終的には制度的なジェンダー配置が回復されてしまう物語構造が剔出される。ここに著者は、探偵小説ジャンルの形式が有する「保守的世界観の再秩序化」への志向と、そこに「向かうベクトルを自ら明かさずにはおれない、テクストの自虐性」(125頁)を抽出している。

他方で、横溝正史『真珠郎』を論じた第6章では、真珠郎が監禁されていた「〈蔵の中〉」のイメージが、「精神病者の私宅監置(座敷牢)の惨状」(155頁)という同時代的なコノテーションを伴いつつ、偽物の「真珠郎」を仕立て上げ殺人を行わせていた真犯人を隠蔽する「ミスディレクション」(166頁)に利用される点に、犯罪者=精神異常者という社会的通念が構成されていく過程が暴露されるとともに、探偵小説のナラティヴが「異常/正常」という区分を転倒させる契機ともなることが指摘される。さらに本書では、第8章でも『本陣殺人事件』の「〈家〉」の描写を、占領下の日本(人)の「領域(テリトリー)の再占拠へ賭ける永住的感性を背景にした」「〈定住への憧憬〉の具象化」(214-215頁)として分析しており、歴史的・社会的な状況が刻印されたテクストとして戦前・戦後を通じた横溝の本格物を捉え直そうとする著者の企図が見出せる。

この『本陣殺人事件』論を含めた第3部では、探偵小説が事実上発表不可能となっていた戦中期から戦後にかけて発表されたテクストが検討される。第7章では、戦時下に発表された小栗虫太郎の南方秘境小説『紅軍巴蟆(パムー)を越ゆ』における「夥しいルビを必要とする専門(或は学術)固有名詞の羅列」で彩られた「〈密林〉」描写が、帝国日本の南進政策に適う「未踏の土地の未知の生物を進化論に基づいて整然と系統化/分類化していくリンネ式博物学」的な知を擬態しながらも、「読者の目を眩ませ、その衒学の正否を問う行為を阻」むほどの過剰性を帯びたものであったことが指摘される(198頁)。

そして、乱歩の戦後のテクストである『影男』を論じた第9章では、1930年代の通俗長編テクストにおいて異常性を帯びた「反逆する〈個〉」として表象されていた犯罪者像が、『影男』ではゆすり犯の影男、殺人請負会社代表、地底パノラマ王国の経営者という三人の分業による組織犯罪となっている点に、「もはや一つの個的立場に収斂しきれず解体し、対立項を無くしてとめどなく拡散していく世相の欲望形態」を反映した「〈新しい物語〉」の萌芽が見出されながらも(237-238頁)、結局は戦前期の自己模倣と

しての「〈古い物語〉」へと収斂してしまうテクストの亀裂を明らかにしている。

3. 展望

以上の要約からも明らかなように、本書では、メディア論、読者論、社会学、カルチュラル・スタディーズ等の知見を生かした各時期の政治・経済・社会・文化的言説の分析と、それらを取り込みつつもそこから逸脱していく小説テクストの様態を捉える表現分析とが高いレヴェルで結び付き、それぞれの時代状況と折衝を重ねてきた近代日本の探偵小説ジャンルの履歴が鮮やかに捉え直されている。

このような達成を踏まえつつ、最後に評者の個人的な感想として、本書において未消化であると思われる点について述べたい。それは、「探偵小説」(あるいは「推理小説」)という言葉が各時代においていかなるコノテーションを帯び、変容していったのかというジャンル記号自体の歴史性についてである。例えば、探偵小説ジャンルが大衆化した1930年代には、「探偵小説」という語は新聞の犯罪報道などで事件の形容や犯罪誘発要因として頻繁に言及され、積極的に現実に結び付けられる形で流用されていた。このようなメディアにおけるジャンル記号の位相は、本書で展開される同時期の乱歩テクストの「ペルソナ造型」を検討する上でも看過しえない問題を内包しているのではないだろうか。なぜなら、『蜘蛛男』以降の乱歩の通俗長編テクストには、「説教強盗」や「鬼熊」といった実在の犯罪者に言及しながらも、それらとは差異化されるものとして作中の犯罪者像を提示するという言説機制がしばしば看取されるからである。このような犯罪者の「ペルソナ造型」を行うテクストには、同時代のメディアにおいて過剰に現実の犯罪と結び付けられてしまっていた探偵小説ジャンルを、現実とは差異化された自律的なフィクション・ジャンルとして再定位しようとする言説的な企図を帯びた、反リアリズムへの志向を読み取ることができる。同時期の乱歩テクストが、本書で考察されたように多様な同時代的要素を取り込みつつも、ある意味では鮮明に反リアリズム的な志向を標榜してもいたことは、上記のようなジャンルを取り巻く環境的側面との相関関係から捉えられねばならない問題であるだろう。このように、「探偵小説」と称されるテクストがある時代に書かれ／読まれることの意味を歴史的に検証していく作業は、本書の達成を踏まえた上でなされるべき今後の探偵小説ジャンルをめぐる研究の一つの重要な課題となるように思われる。

「あとがき」において、著者は自身が当事者として深く関わってきた2000年以降の探偵小説研究の状況を顧みて、本書に収められた論考について「探偵小説をめぐる、ここ十年間の研究動向を跡付けるものであるかもしれない」(283頁)と述べている。このように、本書は近年高まりつつあるアカデミズムの領域における探偵小説研究の一つの重要な成果であるとともに、上記のような日本の探偵小説ジャンルに対するさらなる探究へと読者を触発する刺激的な著作であるといえる。